
とある神父の潜入捜査

非魔神

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある神父の潜入捜査

【Nコード】

N8409M

【作者名】

非魔神

【あらすじ】

イギリス清教必要悪の教会所属の神父、ステイル＝マグヌスはとある事情から高校の捜査を余儀なくされる。

神父と高校が交差する時——物語は始まる！

1話 転校生

イギリス清教、必要悪ネセサリーウスの教会のある一室にステイル^{II}マグヌスと神裂火織はいた。

「よしでは、着替えてください、ステイル」

神裂がごく一般的な制服を差し出す。

「何の冗談だ、神裂」

煙草をくわえたまま、ステイルの口が引きつる。

「潜入捜査です。今からステイルにはとある高校に潜入してもらいます」

満面の笑みを浮かべた神裂がステイルに制服をぐいぐいと押し付ける。

「まさか、あいつがいるとこじゃないだろうな？」

ステイルがツンツン頭の少年を思い浮かべながら言うと、

「そのまさかです。早く着替えてください。今日の八時には学校にいないといけないんですから」

現在、時刻は早朝の五時。

どうやって八時に学園都市にたどり着くのかと考えるが、空飛ぶ

拷問室を思い出して視線を泳がせた。

神裂はステイルの腕を強引につかんで試着室のようなところ無理矢理入れる。

出られないように外側からテープで貼り付ける。
最後に上から制服を放り投げる。

「神裂、僕を誰だと思っているんだ？」

ルーンのカードを試着室一面に貼り付ける。

「世界を構成する五大元素の一つ、偉大なる——」

魔女狩りの王と呼ばれる教皇級の兵器を呼び出そうとするステイル。
イノケンティウス

「無駄ですよ、ステイル。その中で魔術を使うことは出来ません」

外から神裂の落ち着き払った声が聞こえる。

「ん？」

「その小さな部屋は何重もの術式で火に関連する魔術を封じています。無駄な抵抗をせず早く着替えてください」

「くっ……」

ステイルはあきらめ、着替え始めた。

「この服だっちゃんとした意味があるんだ。簡単に脱ぐものじゃないのに……」

ステイルがぼやく。

「今回は戦闘が目的ではありません。報告に霊装は必要ないでしょう?」

神裂が言つと、ステイルは、はあ、とため息をついて着替えを続ける。

数分後……。

ステイルが試着室から出てくる。

2mを越える身長が見事に制服に着られている。

「似合いますよ、ステイル」

「からかつてるのか」

「いえ、全然」

「はあ……。もう、行っていいかい?」

ステイルがため息をつきながら言つと、

「いいわけないです。高校に行くんですよ。その目の下の刺青を消してください」

「いや、これは——」

「やかましいこのド素人が!!」

神裂の言葉にステイルの表情が凍る。

「高校行くだぞ！ バーコードなんておかしいに決まってる
うが！」

「あ、あの、すみません」

女には勝てないな、とステイルは心の中で苦笑いしながら謝った。

「じゃあ、この人工皮膚を重ねてください。三十分でなじみま
す」

薄だいたい色のぶよぶよしたものを神裂から受け取る。

「消さなくて良いのか……」

ステイルの声に安堵が戻ったとき。

神裂はステイルがさっきまで来ていた服を探っていた。

「何をしてるんだ！」

「煙草を探しています。没収しますので」

笑顔で答えて、服のポケットを順番にひっくり返す。

タバコのケースが次々と床に落ちた。

「ちょっと待て。あいつがいてさらにニコチンとタールがないって
地獄以外の何者でもな——」

「黙ってください」

「……………」

一通り、煙草を奪い取って。

小さな箱を差し出す。

「これは土御門からのプレゼントです」

……とある高校。

「はあい、上条ちゃん。机に突っ伏してないで聞いてくださいね」

「上条さんは瀕死のようです」

上条がそういつて机に突っ伏したままだ。

「今日は転校生を紹介します」

ざわざわ、と教室が沸く。

時期的に明らかにおかしいが、朝から立て続く不幸に見舞われ精神の参っている上条はそんなことを気にする余裕も無かった。

「転校生は男だー。野郎どもご愁傷様。子猫ちゃんたちおめでとう」

上条はその体勢のまま、ガラツとドアの開く音を聞いていた。

すると、かつこいいーという女子の声や、でけえ……、という男子の声で教室がカラオケボックス並の音量となった。
流石に気になった上条は顔を上げる。

「……なっ！」

1 話 転校生（後書き）

ご指摘、ご感想、お待ちしております。

2話 三沢塾

顔を上げた上条が見たのは、右目の下にバーコードの刺青があり、派手なアクセサリをまとった、身長2mを越える赤髪の神父、だった男だ。

現在は上条と同じ制服を着て右目の下のバーコードもなく、アクセサリの数も少なく、香水の匂いすら漂ってこない男だが、確実にスタイル・マグヌスだった。

「お前、何やってんだよ!？」

上条ががたと立ち上がってスタイルを指差しながら言う。

「え？ 僕は、転校生だけど？」

「転校生とかふざけたこと言ってるじゃねえよ!」

上条が動揺して頭がうまく回らない。

「捨井ちゃん？ 上条ちゃんと知り合いなんですか？」

子萌先生が口を挟む。

「捨井ちゃん!？」

上条が色々な部分に驚きを隠せない。
まず、偽名がおかしすぎる。

そして、さらに子萌先生がちゃん付けというのにも驚いた。
二人の面識は大覇星祭のときぐらいではないだろうか。

「いえ、先生。こんなやつ知りません」
「先生!？」

動揺する上条が他の生徒を見回すと、大体は冷たい目線かはてな
の視線を向けてくるが、土御門だけはニヤニヤ笑っている。
とりあえず、上条は座った。

「(どういうことだよ! 土御門)」

上条が声をひそめて訊く。

「(話は後だにゃー、カミヤん。とりあえずは子萌先生の話聞く
んだぜい)」

土御門の言葉を聞いてとりあえずは席に座る上条。

「捨井 すてい りゅうま 流馬りゅうまです。至らぬ点もあると思いますがよろしく願
います」

「捨井ちゃんはイギリスからの帰国子女なんですよ。今回は長点上
機学院からの転校なのです」

長点上機学院!？ とクラスがざわつく。長点上機学院といえば、
学園都市でも五本の指に入るエリート校だ。

ムチャクチャだ、と上条は思った。

確かにイギリスから来たのは本当だろう。長点上機学院は能力開
発以外でも一芸に突出していればやっていける。

筋は通っている。だからこそ、おかしい。

「じゃあ、捨井ちゃんは後ろの空いてる席に座ってくださいね」

「はい。わかりました、先生」

ステイルが上条に向かって歩いてくる。

ステイルは上条の横を通り過ぎる時、ふっと笑っていった。

「じゃあ、さつさと次の授業の準備をするのですよ」

先生がそういうと、クラスが一気にうるさくなってクラスの大半がステイルの周りに集まる。

「私のときは。こんな反応はなかった。」

姫神は自分の席に突っ伏したままそんな台詞をつぶやいていたがとりあえず気にしない。

ステイルが質問攻めになっているのをとりあえず無視して、上条は土御門に向き直る。

「どういうことだ？ 話を聞いても分からないんだけど」

上条は質問する。

ちなみに青髪は嫉妬からか何からか質問攻めに参加している。本能的にステイルが年下^{シヨク}の男の子であることを感じ取ったのかもしれない。

「捜査だにゃー」

捜査？ と上条は首をかしげる。

「この学校に魔術<オカルト>に首を突っ込んだやつがいるらしいんだにゃー」

土御門が当たり前のように言った。

「……！　ってことは魔術師がこの学校に？」

「違うぜい。まだ魔術師といえるレベルじゃないぜよ」

？　と上条は首をかしげる。

「昨日の夜、この学校で魔力の反応があつたんだにゃー。だけど、本当に微弱なものだったんだぜい。だから、初心者か誰かが儀式の真似事でもしてるって言うのが上の考えなんだにゃー。その捜査をしにきたのがステイルってことだぜい」

土御門が説明を終えた。

「魔術なんて初心者が適当にやれるもんなのか？」

上条が当たり前の質問をする。

「普通は出来ないにゃー。魔術はそんな簡単じゃないぜい」

土御門はそこで言葉を切った。

「でも、そいつが三沢塾の元生徒だったら？」

「……！！」

上条は思い出す。

記憶を失ってから初めて遭遇したあの事件を。

「っていつでも簡単なことじゃないぜい。大体の記憶はアウレオルスが消してるだろうしにゃー。記憶操作と相性のいい能力だった、

とかそんなんじゃないのかにゃー？」

土御門が適当な推測を並べる。

「そんなアバウトで良いのかよ。ちゃんと見つかるのか？」

「そこはステイルを信じるにゃー」

どうやら上条のクラスはあきやすい性質らしい。

ステイルはもう、開放されていて、上条の後ろに立っていた。

「勘違いするな、能力者。僕の仕事はエセ魔術師の発見と報告だ。

そうでなければ、こんなところにくるのはむしろ走る」

「はぁ……………」

上条はとりあえず一時間目の体育に間に合うよう、校舎裏のバス
ケコートへ向かった。

一人になったステイルが呟く。

「体育……だつて？」

2話 三沢塾（後書き）

次回は読む意味が全く無いです。

ご指摘、ご感想をお待ちしております。

3話 バスケ（前書き）

今日はタイトル通り、バスケだけです。

一度ステイルにスポーツをさせてみたかったです。

バスケを全然知らない方、興味の無い方は最初の方だけ読んでいただければ話の流れはつかめます。

3話 バスケット

（この高校に元三沢塾生は8人。そのうち3人がこのクラス……）

神裂からもらっていた体操服に着替えたステイルはため息をついた。

（何の因果か腐れ縁が知らないが、同じクラスで生活するなんて……）

初日の一時間目から遅れてはまずいと思い、ステイルは校舎裏のバスケットコートへ向かう。

（不幸だ……）

嫌いな少年の台詞を、歩きながら呟いた。

ステイルがついたところには他の男子はアップを済ませていた。

「捨井！ 遅いじゃん」

緑色のジャージを着た体育教師がそこにいる。

どうやら、運動場での女子の体育は別の先生が授業をしているらしかった。

（ん？ この学年担当の体育教師は一人じゃなかったのか？）

ステイルは疑問を感じるが時間が無いと思いすぐに飲み込んだ。

「すみません」

ステイルは小さく頭を下げて謝る。

「早くアップするじゃん」

体育教師の言葉を受けて、ステイルはバスケットの周りを走り始めた。

それに併走するように土御門元春と青髪ピアスがついてくる。

「ステイル——じゃなかった捨井。勝負ぜよ」

唐突に土御門が宣戦布告をする。

口元をやつかせる土御門に対して、青髪は鬼のような形相を浮かべていた。

「（子萌センサーに手を出すやつは許さない。子萌センサーに手を出すやつは許さない）」

青髪の口の端から漏れる声が不気味さをさらに増幅させる。

「そういうことだにやー。ステイルはBチームだぜい。俺と青髪はAチームだからにやー。手を抜くんじゃないぜよ」

土御門はそういつて、前の方へ走っていった。

「捜査だ、って分かってるだろうね？」

言葉をかける相手がいない状況で頼を引きつらせながら言った。

とりあえず、ステイルvs上条&土御門&青髪ピアスのバスケット対決が始まった。

その他多数も含む。

ちなみに両チームに一人ずつ、元三沢塾生がいる。
もう一人は女子の中にいた。

ジャンプボール。

上条のチームは青髪ピアスが、もう片方は、無論ステイルが立っている。

身長差は明らかで頭一つとは言わないまでもそれに近い差があった。

青髪が恐ろしい視線をステイルに送るが、ステイルは気にしていない。

というより、気にしないようにしている。

「じゃあ、始めるじゃん」

黄泉川の手からボールが上に放たれる。

二人は同時にジャンプした。

バンとボールがはじかれる。

「くっ……」

「カミヤん!!」

はじかれたボールを青髪の方かいの上条が取る。
要するに、ジャンプボールは青髪が勝った。

「土御門っ！」

上条は土御門にパスする。

ボールを受け取った土御門はスリーポイントラインの内側までドリブルで歩を進め、そこで止まった。

土御門はそこからタツと軽くジャンプするとシュートを放つ。

スパツ！ とボールはゴールに吸い込まれた。

ステイルが振り返って走り出したときにはすでにボールがネットを通り抜ける時だった。

「何してんだ？ 捨井。オフェンスだ、オフェンス」

男子生徒1に声をかけられ、ステイルは我に戻る。
ステイルはとりあえず、ゴールしたに立った。

「捨井！」

男子生徒2ぐらいの声を聞いて、振り向くとボールが飛んできている。

ステイルは制限区域の少し外側でそのボールを取った。
その場でターンすると、ボールをうつ。

ゴンとボードに一度あたってからボールはゴールを通過する。

土御門がエンドラインから上条にボールを出した。

上条はドリブルでハーフラインを超えたが、そこで足元の石につまづく。

ボールは丁度胸の下敷きになる位置にあつて……。

「ゴハッ！」

肋骨と地面にボールを挟んだ状態で上条は倒れた。

「カミヤん、大丈夫かにゃー？」

土御門が近寄って声をかけてくるが、その顔は笑っている。

「あ、ああ、大丈夫だ」

上条が立ち上がって再びボールをつかむ。

ドリブルを再開して、スリーポイントラインからシュートを放った。

放物線を描いたボールはリングにガコンと弾かれる。

ゴール下には青髪とステイルがいた。

しかし、ステイルは青髪にスクリーンアウトされていて中に入れない。

リバウンドを取った青髪はジャンプしてスッとゴールを入れる。

男子生徒3ぐらいが男子生徒1にパスを出した。

男子生徒1からロングパスがステイルに出る。

ステイルはそれを受け取ると、スリーポイントラインより外からシュートを放った。

ボールは真っ直ぐ飛んでいくが、全く届かず、地面に落ちる。

ボンボンボンとボールの弾む音が悲しく響いていた。

最終結果、上条チーム43点。
ステイルチーム14点。

3話 バスケ（後書き）

すいません。

バスケが分かんないと読めない話ですね。

バスケ描写の中には物語上重要な部分はありませんのでとばしていただいて結構です。

ステイルや土御門の運動能力には色々と根拠があるつもりなんですが、長くなるので省きます。

疑問点があったら感想に書いていただけると幸いです。

ご指摘、ご感想お待ちしております。

4話 タバコ（前書き）

日常編、そして黒幕の影が見え隠れする回です。

4話 タバコ

「ステイルって運動できないんだな」

今、教室への道をステイルと上条と土御門で歩いている。

「魔力を大量に精製する副作用だ」

ステイルは上条の言葉が気に入らないように言った。

青髪は、『臨時で来た女子の体育の先生がすごく美人らしい』という噂を何故か授業終了前から知り得ており、既に運動場へと向かっていた。

「で、どうやって探すんだよ。その元三沢塾生を」

上条が質問してくる。

「地道に探すしかないぜよ。なんせ、俺もステイルも索敵魔術を使えないからにゃー。使ったところでむこうの魔力の反応が小さすぎてほとんど位置を絞れないにゃー」

土御門が気軽に答えた。

少し声が大き過ぎやしないか、と心配になる。

スパイをやっている身でそんな単純なへまはしないだろう、とステイルは無理矢理自分を安心させた。

「ちょ、ちょっと待て。だったらどうすんだよ!？」

「それほど心配することは無いよ。この学校に元三沢塾生は十人もいないからね」

とりあえず簡単に答える。

正確に言っと八人だが、細かいことまで教える必要はない。

「それよりもなんで君が話に参加してるんだい？」

「えっ？ 俺ってもしかして部外者なのか？」

上条は意外そうな顔をした。

「当たり前ぜよ、カミヤん。今回はステイルが決着をつけた三沢塾事件に関わってるからステイルが来たんだにゃー」

「だったら、俺も関係あるじゃねえか」

「何言ってるんだにゃー？ あの事件でカミヤんは使われてただけだぜい」

「それ、ひどいな」

隣での生産性の無い会話を聞き流していると、すぐ教室に着く。
教室に入る時に、大急ぎで逃げるように走っていく生徒を見たが
気にしないことにした。

（少し太めで身長は平均ぐらい、後眼鏡をかけていたな……）

とりあえず容姿だけ記憶しておく。

二時間目の化学。

小テストがあり、ステイルは気分を落ち込ませる。

今のステイルにとって授業はただの邪魔物でしかない。

出来ることなら授業など放っておいて校舎内を調査したいところだ。

しかし、それを見つかつてにわか魔術師に暴走するきっかけを与えてしまつては元も子もない。

ステイルの任務は報告であり、危険分子を突き止め、事が起こる前に対処できる状況をつくることが重要だつた。

しかしステイルは小テストをすらすらと解いていく。

化学は基本的に得意ではないステイルだが、この問題を解けないはずは無かつた。

「捨井、何点だつた？」

隣の名前も知らない生徒に訊かれる。

「100点」

端的にそう返した。

「な、何で!？」

近くで聞いていた上条が驚きの声を上げる。

説明が面倒くさいステイルは無言で小テストの紙を差し出す。

「……………炎色反応？」

テストは炎色反応のテストだ。

簡単に言えば、いろんな物質を燃やしてどんな色の炎が出るかで物質を見分けるといふものだ。

要するに炎の話。

ステイルが間違っはすが無かった。

三時間目。

子萌先生が教壇に立っている。

ステイルは段々イライラしてきていた。

貧乏ゆすりが徐々にスピードを増していく。

「（どうしたんだ？）」

「（何でもないよ。何でも）」

上条の問いに無理矢理答えたステイル。

しかしイライラはとどまることを知らなかった。

次第に痛みが無ければ正気が保てなくなり、首をかきむしる。

「う、うう……………く……………」

自然に口から声が漏れた。

そんなとき、後頭部にコツンと何かが当たる。

ステイルは落ちた紙飛行機を拾い上げた。

紙飛行機が飛んできた方向を見ると土御門がニヤニヤと笑っている。

ステイルは土御門を炎剣で焼ききってやろうという衝動に駆られた。

が現在魔術の威力が小さいことと授業の最中であることを思い出して踏みとどまる。

とりあえず、紙飛行機を開けることにした。

忌々しげに土御門をにらみながら折り目を無くしていく。

『苦しんでるみたいだにゃー。やっぱりニコチンとタールのない世界は苦しいかにゃー？』

ステイルのイライラは加速する。

要するにステイルは煙草が吸えなくてイライラしていた。

染髪やピアスやサングラスが認められている自由な校風の高校だが、さすがに触法行為である未成年の喫煙は許されないだろう。

さらに今は大覇星祭のときたつぷりと説教されかけた子萌先生の前なのだ。

そのときの件は『兄だった』という強引な理由で誤魔化した、さすがに吸う気にはなれなかった。

第一に吸うタバコが無いのだから、どうしようもないわけだが、気を取り直してステイルは続きを読む。

『神裂からもらった小さな箱はあるかにゃー？ あの中にニコチンガムがあるぜよ。噛んで気を紛らわすといいぜい』

そこまで読んでステイルは目から涙をこぼしそうになった。ここまで人に感謝したことなんてこれまでであっただろうか、と思うほどだった。

ステイルは小さな箱が入っているポケットをこそごと探る。しっかりと箱は入っていた。

その中のガムを一気に全部口に入れる。噛み砕くように歯を動かした。

「じはっ！」

舌と口内に痛みを感じて口に入れたガムを全て吐き出す。

「げほげほ！」

ステイルは思いつきり咳き込み、周囲の視線が集まる。

「何してるんですか？ 捨井ちゃん」

教壇に立つ先生が心配そうに小首をかしげている。
事情を話すわけにもいかない事情なので、

「……何でもないです。先生」

と言うしかなかった。

授業が終わり先生が出て行ったのを確認すると、ステイルは真つ先に土御門の胸倉を掴む。

「どういふことが説明してくれるかい？」

青筋が浮き出て、口の端の引きつったステイルが問い質した。

「ちょ、ちよつとした遊び心だにゃー」

土御門は普段の軽い顔のまま答える。

サングラスの奥の目には焦りが見えないでもない。

「一つだけハバネロ入りのガムをいれといたんだぜい。一つしか入れてなかったから安心してたにゃー。まさか一気に食べると思わな

——ごへっ！」

ステイルのひざが土御門の腹を直撃した。

「で、そろそろ限界なんだけど」

結局、ニコチンを摂取していないステイルは既に臨界点を突破していた。

ステイルは小さく手の平を差し出す。

「だ、大丈夫だにゃー。ここにあるぜよ」

土御門がポケットから同じパッケージの箱が出てきた。
すぐさまそれを奪い取る。

「次はさっきのようなことは無いだろうね？」

ステイルは訝しげに土御門を見た。

「この土御門元春、そこまで人の道を外れてはいないぜよ」
「じゃあ、いただくよ」

ステイルが一つとって口に含んで噛む。

ステイルは気持ちが少し落ち着いた。

（何で、土御門がニコチンガムなんて持ってるんだ？）

上条はその疑問をどうにか喉で止めた。

4話 タバコ（後書き）

微妙に伏線回収できたでしょうか。

元はといえば、このニコチンガムの件からこの話は構成されていたといっても過言ではありません。

ムチャクチャな進み方になる可能性もありますが、どうか最後まで見守っていただけるとありがたいです。

ご指摘、ご感想お待ちしております。

5話 昼休み（前書き）

今回は上条さん目線です。

5話 昼休み

四時間目の授業が終わり、昼休みの時間になっていた。

「捨井、土御門！ 一緒に弁と――」

シスターさんの難から逃れたおかずを放り込んだ弁当を持って上条は振り返るが、そこには既に二人の姿は無かった。

（仕方が無いか……）

上条は諦めて弁当箱のふたを開ける。

もともとステイルは捜査のためにこの学校に来ているのだから、授業を受けてクラスにいることの方がイレギュラーだったわけだ。

土御門も同じイギリス清教の魔術師であり、協力するのはごく当然のことだ。

部外者は上条のほう。

最初から関係なかったわけだ。

しかしそこで納得して終わらないのが、上条の短所であり長所だった。

「なあ、この学校に魔術好きな奴とかいるか？」

上条は近くで固まっていた男子生徒の集団に話しかける。

男子生徒たちはキョトンとした顔をした。

オカルト
非科学が日常から排除されている学園都市では普通の反応だ。

少しでもステイルたちの役に立つ情報を、と上条は思ったわけだが……。

そんなにうまくいくはずはないよな、と諦めかけた。
しかし、男子生徒の一人が口を開く。

「えっと……アイツは確かそういうのに興味あったと思う」

名前を思い出そうとしているらしいが、出てこない。

「ああ、二年の加東かとうだろ？」

他の男子生徒が言葉を引き継いだ。

「何か親が宗教やってたらしくてさ、学園都市来ても信仰やめてないらしいよ」

「こつちでも続けるとか至難の業だよな。教会どころか、墓も無いのに」

確かに学園都市こくで宗教をやるにはかなり無理がある。

踏み絵のようなものはないが、言うならば人々の視線が弾圧である。

冷たい目や白い目で見られることぐらいは覚悟しなければいけない。

「そいつって三沢塾に通ってたらしい？」

上条は質問を重ねる。

「多分。アイツの家、金持ちだからな」

「まあ、夏休みに潰れる前にもう辞めてたらしいけど」

条件に当てはまる、と上条は思った。

魔術に手を出す可能性があり、元三沢塾生。

大前提はクリアしたが、全く別の疑問が生まれる。

「何でそんなに詳しいんだ？ クラスどころか学年も違うのに」

上条が問うと、

「ああ、アイツ結構有名人だから」

「五月ぐらいに広告用の気球撃ち落とそうとしたんだっけ？」

上条が知る由も無いことだが、そこそこの事件を起こしているらしい。

「宣伝文句が宗教をバカにしてる、とかいってたやつだろ？」

「学園都市なんだから当たり前だよな」

もしこいつがその魔術師もどきだとしたら事件を起こす可能性は十分にあるってことだ。

「でも、最近おとなしくなったよな……」

「確かに。アイツを追いかけてた新聞部のやつが嘆いてたぜ」

（最近、おとなしくなった？）

魔術に手を出して、ほかに目を向ける余裕がなくなったというところか。

確信に至るほどの情報ではないが、十分参考になる。

「そいつのフルネームは？」

「かとうまさ加東正だ」

（よし、ステイルに報告するか……）

食べかけの弁当を残したまま、上条は席を立つ。

「ありがとな」

「おう、不幸運んでくるなよー！」

背中からかけられた言葉にガツクリしながら上条は教室を出た。

5話 昼休み（後書き）

さらに犯人に近づきました。

一度全部消えてしまったため、予定より短めになっています。

ご指摘、ご感想をお待ちしています。

6話 職員室

上条が男子生徒から話を聞くのとはぼ時を同じくしてステイルは職員室に来ていた。

「夜間入校の許可記録が見たい？」

ステイルの目の前の緑ジャージの教師、黄泉川愛穂が不思議そうな声を上げる。

夜間入校というのは要するに能力の使い方を練習したい生徒のために夜、校庭や校舎を貸し出すことである。

声を操る能力者に音楽室を、運動機能を高める能力者に校庭やプールを。

そんな風に能力開発を支援する形で大抵の学校にある制度だ。しかし、寮の門限や生徒のやる気の問題でほとんど使われていないことも多い。

この学校は能力開発が盛んではないため、使っているのは一部の真面目な生徒か、もしくは悪いことを考えている生徒である。

だから、ステイルはそれを見せてもらおうと考えた。

「何でそんなのが必要じゃんよ？」

黄泉川の質問にステイルはすぐには答えられない。

捜査です、と言う訳にもいかなないので別の理由をでっち上げなければならぬ。

「あの、友達がちょっとものを無くして、それで、昨日の夕方まではちゃんとあったらしくて、夜に誰かが盗っていったんじゃないかって……」

ステイルははっきり言って話術は苦手だ。
切り札の意味が『必ず殺す』であることから分かるように話し
合いをするぐらいだったら相手を燃やしている。

「何が無くなっただんじゃん？」

黄泉川の追求は続く。

「きよ、教科書です……」

あわててステイルは適当に答えた。
今日のステイルにとって一番身近だったものだろうか。
とっさに出たのはそんな言葉だった。

「教科書を学校に置いてく輩で子萌先生のクラスっていったら……
上条だろ？」

上条ということにしておけば、色々と都合が良さそうだとステイ
ルは考える。

「は、はい……」

詰まりながらもそう返した。

「何で本人が来ないんじゃん？」

まだ納得させられてはいないようだ。
黄泉川の質問は的を射ていて、言われてみれば当然の話だ。
この問いに対する答えをステイルは持ち合わせていない。

もとがでつち上げた話であり、上条と打ち合わせをしたわけでもないからだ。

ガラツと後ろでドアが開き、救世主が現れた。

「カミちゃんなら購買で格闘中ぜよ」

サングラス姿の不良少年、土御門元春がそこにいた。

「上条ちゃんは弁当ではなかったのですかー？」

隣で何となく話を聞いていたらしい子萌先生が口を挟む。
その疑問もしっかりと矛盾を指摘していた。

「なんか、登校途中にひっくり返したらしいにゃー」

土御門がそれだけ言うと、

「そういうことだったですかー」

「事情は分かったじゃん」

と場が一気に納得した。

ステイルは感心する。

イマジンブレイカー

幻想殺しの不幸体質に付属する妙な説得力を、最大限活用する土

御門元春にだ。

（さすが潜入のプロ、といったところか……）

ステイルが思いながら土御門に視線を向ける。

土御門は、これがスパイたる所以だにゃー、とでも言いたげな眼

差しを返してきた。

「でも、教科書盗む奴なんていないと思うじゃん」

黄泉川が言った。

「僕もそう思います。でも、念のため確認しておきたいんです」

ステイルが言うと、さすがに黄泉川もおれたらしく書類を探しはじめた。

「あつたじゃん。確かめてすぐ返すじゃんよ」

黄泉川から資料を受け取ると、ステイルと土御門は目を通し始める。

出てくる名前は大体バラバラでたまに土御門元春の名前も見つけた。

気になるが、本題とは関係ないので無視する。

そして、気になる名前を見つける。

最近になって急に夜間入校の回数が増え、さらにここ三日間毎日夜間の学校を貸しきっている生徒の名を。

その名前は——加東正。

6話 職員室（後書き）

どうしても説明文が長くなってしまいました。
今回も全体としては短めになりました。
次回はバトルパートになるかもです。

ご指摘、ご感想をお待ちしています。

7話 フラゲ（前書き）

バトルパートには入りませんでした。

今回は禁書の王道？みたいなものを目指しました。

7話 フラゲ

（加東、正？ 確か……）

ステイルはポケットの書類、元三沢塾生のリストを取り出す。
パラパラと四枚ほどめくると、そこにも『加東正』という名前が
あった。

（やっぱり、コイツ——）

ステイルは書類の顔を見て思い出す。

一時間目の後の休み時間だ。

ステイルたちの後ろを逃げるように去っていった生徒。

眼鏡をかけた少し太めの

その男が加東正だった。

（盗み聞きされている可能性もある。急がないと……）

焦りを感じたステイル。

「ありがとうございます」

夜間入校の許可記録を黄泉川に押し付けるようにして返した。

「もういいじゃんよ？」

はい、とステイルは短く答え職員室から出ていく。

長い髪を下ろした見覚えのある女性とステイルはすれ違った。

（――！　今は……いや、そんなはずはない。とりあえず、急ぐ）

早足で廊下を歩くステイルに土御門が続く。

「ビンゴみたいだにゃー」

土御門が周りを気にしない口調で言った。

「そうみたいだ。暴走してなきゃいいが……」

言いながらステイルは階段を上り始める。

「ちょ、うわっ！」

階段の上の方から聞き覚えのある耳障りな声が聞こえたかと思うと一人の少年が転がり落ちてきた。

バン！　落ちてきた少年とステイルが団子になり、階段の一番下まで転がる。

かたや赤髪長身、かたやツンツン頭の少年は仲良く廊下にのびた上条の上に折り重なっていたステイルは服に付いたほこりをはらいながら無言ですぐに立ちあがる。

「不幸だ……」

ステイルに続き上条がお決まりの台詞を呟きながら起き上がった。

「すみません！　大丈夫ですか？」

いかにもスポーツ少女らしい女の子が階段を駆け下りてやってきた。

少女は立ち上がって凜としているスタイルには目もくれず、上条へと駆け寄る。

「大変！　ここ擦りむいてる！」

上条の肘を見て少女が声を上げた。

その傷はかすかに血がにじんでいる程度だ。

ここ数ヶ月の間に上条がしてきた怪我に比べれば何てこと無いものだ。

「今すぐ保健室に行かないと……。ああ大丈夫ですか!？」

一人でパニック状態に陥る少女。

「いや、大丈夫」

上条は一言で優しく止めた。

「すいません。私がボールを落としたばかりに……」

少女は頭を深く下げ、申し訳なさそうに去っていく。

「ぬう、カミヤん。こんな切羽詰まった状況でもフラグを立てるなんて……」

土御門が嘆いた。

「あ、ステイル！ 実は加東正っていう男が――」
「分かってる」

上条が言い終わる前にステイルが歩き出す。
上条はキョトンとした。

「今、そいつのところに向かってるところだ」

とりあえずはその台詞で納得したらしい。
階段を上るステイルに上条がついてきた。
さらにその後には土御門が続く。

「その加東正っていう奴、親が宗教やってて、魔術には少なからず興味があるって話だ」

上条が話し出した。

「かなり変わったやつでそこそ名は知られてるらしい。少し前に飛行船を撃ち落とそうとしたと言ってたな……」

上条が手に入れた情報を話し終える。

「そうか。やはり、あいつが犯人で間違い無さそうだな」

犯人といってもまだ何もしていない。

何かやらす可能性があるというだけなのだが。

話しているうちに加東正がいるクラスの教室前に到着した。

7話 フラゲ（後書き）

今回も短めです。

バトルパートに入りませんでした。

今回は禁書の王道？みたいなものを目指してみました。
多分失敗しましたが。

次回は確実にバトルパートに入ります。

ご指摘、ご感想をお待ちしています！

8話 加東正（前書き）

今回はバトルです。

8話 加東正

ステイルは廊下を見回して、加東がいないのを確認すると、

「加東正さんはいますか？」

教室の入り口付近に立っている男子生徒に声をかけた。

「ん？ うわっ！ でっけえな……」

男子生徒はステイルの身長に驚いてのけ反る。
すぐに状況を理解すると、

「加東なら多分いると思うぞ」

そういつて教室の中を向いた。

「加東！ 何かでつかい奴が呼んでるぞ！」

教室の奥の方の椅子に座っていた男がビクツと肩を震わせた。
少し太っていて、振り向いた顔にはメガネ。

彼が、加東正だ。

事件を起こしたという話を聞いていたのもっとクラスには堂々と居座っているんだと思っていた。

どうやら、宗教関連の話になると人が変わるタイプらしい。

ということは、やはり危険人物の素質は十分か。

おどおどしながらステイルの方へ歩いてきた。

「すみません。少しお話したいことがあって……。場所を移しても

らつても構わないでしょうか……」

ステイルが話している間も加東の視線は廊下や上条、壁と移り変わっている。

すると、唐突に土御門がステイルの前に出た。

「昨日の夜の話を、聞きたいんだけどにやー」

（土御門！？　ここで話してどうするんだ？）

ステイルは思考をめぐらせるが、答えは出ない。
人がたくさんいるところで騒ぎになっていい事はないはずだ。

「アンタ、昨日学校で何してた？」

（ば、馬鹿！）

「違うんだ。ちょっと教えてほ——」

ステイルが弁解を終える前に、加東は走り出す。
過ぎ去るときの目はおどとした目ではなくなっていた。

「くそっ！　何をやってるんだ、土御門！」

ステイルは土御門を怒鳴り、加東を追いかける。

「大丈夫なのか！？」

上条が後ろから声をかけてきた。
ステイルはそれを無視して、加東が上がった階段を続いて上がる。

「どけ！ 邪魔だ！」

加東が階段にいる生徒を押しつけながら進む。
おどおどした雰囲気は既に亡くなっていた。

きゃっ！ と女子生徒が突き飛ばされる。

その女子生徒は上条に体当たりするようにぶつかった。

上条は全身を使って受け止めるが、耐え切れずに階段の下に落ちる。

加東が三階へ上がる。

ステイルは追いかけるが足がついていかない。
バスケの疲れだろうか。

加東は三階の廊下を突っ切った。

どうやら次は下に降りるつもりらしい。

加東が降りようとする階段に土御門が立ちふさがっていた。

「屋上に追い込むぞ！」

土御門が加東にも聞こえるように叫ぶ。

加東はさらに慌てたように判断力を失い、自ら屋上への階段を登りはじめた。

「来るな！」

加東が屋上のドアを開けながら、振り向いて怒鳴る。

勿論、ステイルも土御門もその程度では動じない。

バン！ と加東がドアを閉める。

ステイルが開けようとするが、向こう側から押さえつけているらしく開かない。

「どけ……」

見かねた土御門がステイルに言うと、唐突に蹴った。

ボガン！ と大きな音がしてドアが開く。

ドアの向こう側では加東が吹き飛ばされて座り込んでいた。ざっと見渡した感じ、屋上は荒れていた。

草がコンクリの隙間から生え、石がいくつも転がっている。開けたドアを通り、二人は屋上に出た。

「何で逃げた？ 何かあるんだろ？」

土御門が加東を追いつめる。

加東は座り込んだまま後ずさって、右手で足元の石を一つ拾った。

（加東の能力は………！）

ステイルは思い出し、嫌な予感を感じる。

「危ない！」

ステイルが土御門に叫ぶ。

土御門は気にする様子もなく加東に近づく。

加東はにやりと笑ってから右手を思いっきり振った。

手から放たれた、ただの石、は恐ろしい速度で土御門の懐に向かう。

「ガッ！」

無防備な脇腹に石が当たった。

土御門は激痛に顔を歪ませ、脇腹を抱え込む。

すかさず、加東が立ち上がり、右の拳で土御門の胸を打ち抜いた。土御門の体がステイルの前まで飛ばされる。

ステイルは嫌な予感が現実になったことを確認した。

加東正の能力は豪腕投法スローオーバーと呼ばれる。

簡単に言えば肩から腕にかけての筋力を強化する能力だ。しかし、強化されるのは筋力とそれを生み出す筋肉だけ。壁を思いっきり殴れば皮膚や骨には傷が付く。

関節がやられるかもしれない。

そういう危険性が少ないのが、投げる、という行為。

思えば、上条の言っていた飛行船を撃ち落とすという事件もこの能力を利用したもののか。

「大丈夫か！？ 土御門！」

屋上の扉を次にくぐったのは、上条当麻だった。

8話 加東正（後書き）

バトルのメインは次になりそうです。
昨日は更新できなくてすいません。

ご指摘、ご感想をお待ちします。

9話 ハズレ（前書き）

少し間が空いてしまいました。
今回はメインバトルパートです。

9話 ハズレ

開いた扉を通ってきたのは、上条当麻だった。
目の前に倒れる土御門を目にして上条の表情が変わる。

「テメエ、土御門に何をした！」

座り込んでいる加東をにらみつけながら、上条は怒りの声を上げた。

「気を付ける！ アイツは筋力を強化する能力者。幻想殺そのみぎてとは相性が悪いぞ！」

ステイルは上条に声をかける。
別に心配をしているわけではなく、戦力を存分に利用するためだとステイルは思っている。

「ふふふ」

不気味な笑いを浮かべる加東。
その手にはまだいくつかの石が握られている。
土御門への先制攻撃が見事に成功し、油断しているのか。

「だ、大丈夫だにやー。——げぼげぼっ」

脇腹には切り傷、そして胸を殴られたときには肺や肋骨に大きな力がかかっただろう。

苦悶の表情を浮かべながら土御門は立ち上がった。
既に土御門は加東を見据え、戦闘体勢に入っている。

「ひひひ」

加東はどこか高笑いのようでどこか引きつるように笑った。
それが合図となった。

「うおおおおおおおおおおおおお！！」

上条が加東の正面から突っ込む。
ただ突っ込んだのではない。

勿論、陽動だ。

加東が上条を迎撃しようと石を投げる。

しかし所詮は筋力の強化。

もともとから掠るような軌道だったため、上条は軽く右にステップを
踏んで避けた。

手の届く距離まで近づいた上条を加東が右腕で迎え撃つ。

速い拳だが、上条は上半身を振って避けると右の拳を加東の顔面
に向かって打った。

「ふっ」

拳は途中で止められる。

止めたのは左腕。

上条の幻想殺しこぶしに触れて筋力の強化は無くなっている。
が、しかし、攻撃を止めたのは事実だ。

加東は空いている右腕で上条を殴る。

上条は加東と同じように左腕で防ごうとした。

けれど、上条の左手に幻想殺しはない。

筋力強化によって人間らしからぬパワーを得ている右の拳が上条
の腹を捉えた。

「がはっ！」

上条が吹き飛ぶ。

この一瞬を狙っていたのが土御門だ。

上条を殴り飛ばした余韻に浸る加東の後頭部に拳を打ち抜いた。ゴツと拳と頭部の衝突音がし、加東が前のめりになる。

すかさず土御門が蹴りをくわえ、耐え切れずに加東は倒れた。

両腕以外はただの人間。

それもどちらかというと運動不足だ。

倒れた加東は寝返りを打ち、土御門から後ずさる。

先ほどと同じ構図だが、土御門は加東が何かを投げけることを警戒している。

下手を打つはずがなかった。

加東はそれでもにやつと笑った。

土御門が避けれる体勢をとる。

加東が投げた。

土御門は避けなかった。

ズサア！ と土御門が屋上の荒れたコンクリの上を滑る。

さらには給水タンクの底あたりに頭をぶつけた。

加東が投げたのは上条。

両腕をいっぱいに使い、人を投げてきた。

思いつきり屈めば避けられないこともないが、避けたら上条は給水タンクの硬い金属に一直線だ。

土御門は受け止めるしかなかった。

「ふふっ、作戦勝ちかな」

気持ち悪い笑みを浮かべる顔。

「後はお前だけだよ……」

気味の悪い言葉が発せられる。

「かかってこい」

ステイルはポケットに突っ込んでいた手を引き抜いた。
そして、小さな紙をばら撒く。
それはただのノートの切れ端。

「ん？ 何このおもちゃ……。へへへ、馬鹿にしないでよ」

加東はそう一蹴した。

それに対して、ステイルは無防備に歩いていく。
走りもせず構えもせず、真っ直ぐ加東に向かって歩いた。

加東は石を投げることなど考えもしない。
ただ歩いてくるだけの人間にわざわざ物を使う必要がない。
拳で迎え撃てば良いだけの話だ。
眼前に迫ったステイルに右手を繰り出す。
完全に顔面を捉えるコース。

（決まった……！）

加東は既にそう確信していた。
しかし、加東の拳は空を切る。
目の前にあったはずのステイルの像がぶれた。
いたはずなのに、いない。
しかも頬の横から急に何かがぶつかってきた。

痛みの感じからして殴られたような感じだ。
理解不能な状況に冷静さを失う。

「こつちだ」

不意に後ろから声がして、加東は振り向いた。
誰もいない。

慌てて、周りを警戒しようとした頃に背後から蹴りが入る。
倒れそうな体を起こして振り返ったときにはステイルは数m先にいた。

「この野郎おおお——」

叫びながら殴りかかろうとすると足をかけられて転ぶ。

「うっ！」

殴ろうとする不自然な体勢で倒されたため、手を付くまでの暇す
らない。

地面に無様に転がった。

仰向けになり、起き上がろうとすると、ステイルが現れた。
その手には炎の剣。

自分の首元まで伸びている。

「動いたら殺す」

ステイルの有無を言わせぬ言葉に加東の思考は混乱した。

「昨日の夜、何をしていたか白状しろ」

そう突きつけられた。

ステイルは蜃気楼を使った。

ノートの切れ端にシャーペンの文字。

おそらくこの世で一番簡略化されたルーンのカードを使っているように見える場所には常にはいない。

そうするだけで加東を手玉に取ることが出来た。

そして、今、少ない魔力を絞って作られた炎剣を突きつけている。後は加東の自白のみ。

これで事件は解決する。

本当の任務は『限りなく疑わしい人物を見つけ出し、報告する』というものだ。

しかし、それ以上のことをやれば文句は言われないだろう。

「さあ、言え」

鋭い目つきを威圧するようにあびせかける。

「……ません」

加東が小さく呟いた。

「はつきり言え」

ステイルは炎剣の先に集中する。

刺してしまってもいけないし、有事の際には即刺さなければなら
ない。

加東の顔に汗が垂れていくのが見える。

「盗撮をしてすいません……」

上半身だけ起き上がらせた体勢から力が抜け、加東は地面にのびた。

「もう一度言ってみろ」

ステイルは理解できない思考を抱えながら加東に命令する。

「盗撮をして……すいません……」

搾り出すように加東が再び言った。

ステイルは状況を理解する。

と、同時に怒りが湧き上がった。

結論を間違えていた自分と価値の無い答えを用意していた加東に對しての怒りが。

ステイルは炎剣を突きつけるのをやめた。

「歯を、食いしばれ」

ステイルの拳がコンクリの上の加東の頭にクリーンヒットする。

丁度、そんなときだった。

騒ぎを聞きつけた先生が屋上に来たのは……。

9話 ハズレ（後書き）

説教フラグです♪

この小説ではじめてのバトルシーンだったと思いますが、どうだったでしょうか？

敵が弱いって言うのと、ステイルが強いつていうのがあって後半は一方的になってしまいました。

堅いと書きにくいかな、と思いますので、感想下さい！

後、評価などもいただけたら嬉しいです！

10話 指導室（前書き）

2、3日に一回、自分は何を持ってそんなことを言ったんでしょう。
無理ですね。

一週間に一回がいいところです。

今回は第一のバトルの事後処理です。

10話 指導室

「全く……転校初日に乱闘騒ぎなんて前代未聞じゃん」

「学校生活は集団での行動を学ぶ場ですよ。周りに暴力を振るったり、ましてや上の学年に喧嘩を仕掛けるなんて——捨井ちゃん、聞いてるんですかー？」

ふてくされたように俯いたステイルの顔の前で小学生サイズの先生、子萌がぶんぶん手を振ってアピールした。

対してステイルは『僕は無罪ですから』というように応じない。ちなみにステイルの両側には体に軽く包帯を巻いた上条と土御門が同じくふてくさたように座っている。

「上条さんは巻き込まただけでせう……」

「……………」

という感じで二人とも話を聞こうとはしていない。

三人が進路指導室に閉じ込められてから、かれこれ1時間ぐらい経ったような感じだ。

途中で他の先生が一度入ってきたが、何か報告をして出て行った。もうそろそろ5時間目が終わっていきそうな時間だ。

先生も先生で、

「大体、黄泉川先生が夜間入校の許可記録なんて見せるからこうなつたんですよ」

「何でじゃん。子萌先生だって納得してたじゃんよ」

などと内輪もめを始めている。

ステイルは一人で考え始めた。

（加東正はエセ魔術師ではなかった。となると、必然的に他の誰かがそうなる訳だが、一体誰だ？）

加東正ほど条件に合致した人物はいない。

魔術への興味、三沢塾への加入、夜間の入校。

三つ全て合わせればとことん犯人像に近い。

（夜間に学校に入ったのは盗撮用のカメラを仕掛けるため……。ふざけた理由だがそれが事実なのだったら仕方が無い。ただ、そのためだけと言えるか？）

ステイルはとりあえず先生たちへの質問が浮かんた。

「あのー頬のつねりあいをしているところ悪いんですが、加東正の言っていたカメラは見つかったんですか？」

へ？ と二人の先生は互いの頬を持ったままこちらを向く。

あーあーカメラのことですか……、と子萌がさつき入ってきた先生から受け取った資料をごちゃごちゃし始めた。

横から黄泉川が『そんなの見せたらまた何か問題起こすじゃんよ』と耳打ちする。

立派に問題児認定されたな、とステイルは心の中で嘆息した。

「こういうのは見せておかないと後から逆に面倒くさいものなのですよー」「そりゃ問題児の扱いに慣れてんのは子萌先生じゃんよ。けど、子萌先生のクラスで問題が起こっているのも事実じゃん」「せんせーのクラスは問題児じゃありません。元気があふれてるだけ

です」

繰り広げられるステイルの知識の及ばない会話。
いつまで聞いていてもステイルには何も生まれない。

「カメラの話ですけど……」

そうでしたねー、と子萌先生が紙を取り出す。

「まだ全部とは限りませんけど……」

そういつて差し出された紙には学校の見取り図が書かれていた。
その上に監視カメラが会った場所には小さなシールを張っている。
大体は女子トイレや更衣室、あからさまに欲望丸出しな場所だ。
しかし、比較的入り口付近が多いような気がした。
そしていくつか不自然なものを見つける。

(……なんでここは廊下についているんだ?)

ステイルが気になったのは二階の廊下の両端だ。
欲望丸出しな部分以外で廊下などについているのはそこだけだ。

(むしろ、ここが本命か?)

ステイルにはそう思えた。

他の監視カメラと違いここだけは目的が分からない。
盗撮、という趣旨にあった目的が。

つまりは、ここに限っては、別の目的があるということか。
例えば、二階の教室で儀式の真似事をする際、見回りなどに見つかからないようにするために。

もしくはその二つを誤魔化すために他の数十個を付けたのか。
何はともあれ、加東にはまだ聞くことがある。

「先生、加東は今どうしてますか!？」

突然の質問に首をかしげる両先生。

「加東なら一通り尋問したあと病院にいったじゃん」

「捨井ちゃんがやりすぎましたからねー」

苦笑いする先生達を見てステイルは焦る。

(まだあいつが犯人じゃないという証拠は無い)

椅子からバツと立ち上がると二人の先生の制止を振り切り、進路
指導室を出て行った。

そのあと、残った二人がさらに厳しい説教を受けたことをステイ
ルは知らない。

10話 指導室（後書き）

今回は微妙だったです。

感想、お願いします！

11話 優しさ（前書き）

1年5ヶ月ぶりにこんにちは。
必ず完結させてみせますのでよろしく願います。

11話 優しさ

捨井——ステイル——が、病院に向かった（と伝えられている）加東を追っている頃。

上条と土御門がいる教室では6時間目の授業が始まっていた。

「す、捨井ちゃんは早退なのですよー。理由はプライバシーに関わるので言えないのですー」

教壇では月詠が多少おどおどしながら報告する。

とはいっても、三馬鹿^{デルタフォース}効果で、こういったトラブルに慣れているのか、心底動揺している様子は無い。

そして、生徒達もそういうことに耐性があるのだろう。特に不審に思う様子は無かった。

「6時間目は自習なのですー」

との合図で恐ろしいぐらいの騒がしさが教室に広がる。

いつものことといえbaumbaumbaumのこともなのだが、それを統率するはずの教師、月詠と、委員長的立ち位置にいる吹寄は軽く頭を抱えている。

しかし、特に注意するでも止めるでもなく、このまま授業は続いていきそうだった。

「なあ土御門、ステイルは大丈夫なのか？」

「なうに、カミヤン。あれだけ武器の少ない状態でも能力者に勝ったんだにゃー。そこらへんの能力者に負けるはずがないぜい」

土御門は白い折り紙に青いインクで色を付けながら言う。

上条は、不安げな目で、

「いや、そうじゃなくてさ、街の中で戦い始めたりしないかと思っ
てさ」

「……ありえない、という確証はないにゃー。けど、ステイルの任
務は犯人を見つけて報告するだけのはずだぜい」

「だったら余計危ねえじゃねえか！ さっきは戦っちまったんだぜ
？」

「危ない、かもにゃー」

土御門は笑っている。不安要素を口にしながらも、そんなものは
不要だと言いたげだ。

同じ組織に属する信頼感が安心感か。

「けど、心配は要らないぜい。なんだかんだ言って、ステイルは優
しいからにゃー」

上条は、土御門の言葉に素直に同意した。

ステイルが見せる冷酷さや残酷さは、全てインデックスへの優し
さの裏返しなのだ。

街中で戦闘を行うことは、インデックスを招いてしまう危険につ
ながる。

そんなことはしない、と上条は結論付けることが出来た。

一方、その頃、ステイルは……。

「まったく、どこに行っただんだ！」

ステイルも全く見当を付けずに動いているわけではなかったが、何せ、街は広い。

人払いのルーンなどを使えば、多少は相手の行動を誘導することは出来るが、あいにくと取り上げられている。

元々、潜入捜査と言っただけあり、隠密行動で犯人を確かめ、報告するのが仕事だった。

だから当然、街へ繰り出して犯人らしき人物を追うことなど想定外だったのだ。

しかし、悪事がバレそうになったときに、あのような臆病な者がどうするかは大抵決まっている。

隠蔽するために策を講じることだ。

証拠を捨てに行く、目撃者を殺す、などだ。

この場合、既に盗撮事件は発覚している。

と、なれば、それとは違う別の事件を隠そうとするはずだ。

証拠を消す、ということは、その場面には証拠がある、ということでもある。

けれど、その場を逃せば二度と証拠はつかめないかもしれない。

「まだ5分も経ってないはずだろう……」

5分あれば相当な距離を移動できるかもしれない。

しかし、加東は怪我をしている。

他でもない、実際にその怪我を負わせたステイルが知らないはずもない。

そうそう距離を稼ぐことはできないはずだ。

「クソ……どこにいるんだ！」

黄泉川は『加東は病院に行った』と言っていた。
何をもってそう判断したのだろうか。

本人の言葉？ あ教師は人がよさそうではあるが、それゆえに
甘い行動は取らないはずだ。

盗撮事件の犯人で、まだまだ事情を訊くべき相手を釈放するのだから、自己申告を信じるようなことはしないはずだ。

（……車？ いや、学園都市では、その可能性は低い。大体、運転する側の人間がいない）

（バス！ そうか、バスだ。病院方面のバスに乗って途中下車すれば……）

ステイルは携帯を開き、第七学区内の病院の位置を検索する。

一番近いのは、やはり上条が何度も世話になっているあの病院だ。
ステイルも行ったことがある。

高校から病院へまっすぐつなぐバスの路線で、時間を考慮すると……。

1時15分発の無人バスへ乗ったはずだ。

途中下車できる駅は2つあるが、そのうち一つ目の駅は別の高校の前だ。

人目が多く、証拠隠滅には適さないだろう。

ということは、もう一つの、学生寮の前のバス停だと考えるのが自然だ。

昼過ぎの時間帯に、ほとんど人はいないはずだ。

町で騒ぎを起こされると、かなり面倒なことになる。

インデックスが異変に気付いて事件に関わってくるのかもしれない

いのだ。

それは、ステイルとしては何としても避けないといけないこと。
ステイルはずっとそのために戦ってきたのだから。

（急げ！ 時間はないぞ）

自分に言い聞かせ、ステイルは走る向きを変えた。

11話 優しさ(後書き)

次回も近日更新予定です。

感想、レビュー、評価、お願いします！

12話 バス停（前書き）

どうも。

一時期のような更新ペースを維持したいです。

12話 バス停

ステイルは学生寮の前のバス亭までやってきた。

路地をショートカットしてきたので、バスの到着予定時間まで後2分ほどあるはずだ。

「はぁ……はぁ……」

呼吸が落ち着かない。

大量に魔力を精製するステイルは、比較的体が弱い。

普段はそこを魔術でカバーするのだが、魔術的な補助がない今では長距離を走るとはあまり得策ではなかったのだ。

もともと、学校内での調査を主としていたがために起きたことだ。戦闘を行った時点で既にかなり危ういのだ。

だから、これからはなるべく穏便に済ませなければならない。

78

バスがこちらへ走ってきた。

乗客がああ男しかいなかったら、前のようにバスごと吹き飛ばすことも考えたが、どうやら他にも数人乗っているようだ。

ステイルがいるのだから、あのバスはここで止まるだろう。

バスに乗り込んで引きずり出してやろう。盗撮事件の犯人だということを明示しながら行えば、通報されるようなことはないだろう。

バスが止まる。

ドアが開いた瞬間にステイルは乗り込んだ。

バスの中をざっと見回して……困惑する。

——いない。

特徴がない男とはいえ、さきほど殺しかけた人間だ。そうすぐには忘れない。

それに、そもそもこのバスには女子生徒と教師らしき大人しかないのだ。

（――駄目だッ！）

閉まろうとするドアに手をかざし、安全装置として止まった扉を押し開けバスを降りた。

ステイルの後ろで扉は閉まり、すぐに発進した。

このバスではなかったのか？

他の病院に行った可能性も考えられるか……？

考えられないことはない。けれど、不自然だ。

大きな怪我でなかった以上、専門的な治療が必要な場面ではない。どの病院でも間に合うレベルの怪我で、近くない病院を選ぶことは、怪しまれる。

歩きで行くのはより不自然。

（何か、何か見落としているんだ……）

一つ目の駅で降りないと考えた理由は、人の多さだ。

人が多い場所では証拠を消し去るのが難しい、と。

この推測自体が間違いで、人が多くても難なく証拠隠滅が可能なのもかもしれない。

しかし、それならば高校を出る必要はなかった。

怪我はたいしたことないと言って、学校内で処分すればよかったのだ。

盗撮事件の犯人として注目されているから難しいと考えたのか？

（違う。……もっと根本的なところだ）

そもそも証拠を消すことが目的じゃないとすれば？

話は大きく変わってくる。

臆病者が行う行動。

事件を隠蔽する……。いや、それだけじゃない。

（仲間……。そうだ、あいつは仲間に助けを求めにいったんだ）

加東が盗撮を行っていることが判明した時点で、他に魔術を行使した人間がいるという話になった。

そして、加東が単なる盗撮犯ではないと分かり、やはり加東が事件に関与していると結論付けた。

けれど、複数の人間が関与している可能性はまったく否定できない。

単独犯だと決め付けていたが、先入観に過ぎなかったのだ。

（となると……。クソッ！ 前のバス停は高校前だ！）

その高校に仲間がいるのかはわからないが、加東が降りた場所に見当がついただけでも僥倖だ。

（しかしこのままだと……。、）

仲間と合流されると面倒だ。

やけになって問題を起こされると困るのだ。

p r r r r……。携帯が鳴った。

着信は、土御門からだ。

「どうしたんだ？」

『授業が終わった。人はすぐにいなくなる。その後、魔術の痕跡が残ってる場所を探す。戻ってくれ』

「今はそれどころじゃ……！ 加東には仲間がいたかもしれないんだ！」

『……仲間』

「加東は病院に向かうバスを途中で降りた。降りたバス停はおそらく高校の前だ。協力者がその高校にいるかもしれない」

『その高校つてのは？』

「ちよって待ってくれ」

ステイルは携帯を開き、バスルートの地図から学校の名前を確認した。

「……ッ！？」

『どうした』

土御門の声が曇る。

「……僕が通ってたことになっている学校だよ」

『……おい、それって……』

「ああ、長点上機学園の第七学区分校だ……」

12話 バス停（後書き）

どうも、ご都合主義のオリ設定が少し入ってきますが、すいません。

長点上機の生徒って思いの外、出てこないですね。

感想、レビュー、評価、お願いします。

13話 二人目（前書き）

どうも、こんばんは。

後4回ぐらいでおしまいだと思います。

13話 二人目

帰り道。

上条と土御門と青髪ピアスが並んで歩いている。

「臨時の体育教師……あれは逸材や！」

「何のだよ……」

「黒髪ロングでお姉さん系のボンツキュッボンツ」

「……お姉さん系？」

「年は……20代の後半っていうところやけど、黄泉川センサーにも劣らないあのスタイルは……んー！ たまらんでえー」

ひとしきり一人で盛り上がった青髪は、パン屋の手伝いがあるとかどうかで一人帰っていつてしまった。

「ステイルはいないけど、大丈夫なのか？」

二人になったので、名前を気にせずに上条は土御門に問う。

「大丈夫だにゃー。どうせ、校舎内を調査してそれで終わりだと思うぜよ」

「さつき走って出て行ったけど……。というか、普通に話しているけど、俺は部外者じゃなかったのか？」

「教えなくても首を突っ込んでくるんだからどっちにしろ同じなんだぜい」

「ま、まあ、そうかも知れないけど……」

「問い詰められて鬱陶しいだけなんだしにゃー」

「あのお、今日の前半から思ってたんだけど、土御門さんの中で私はどういう存在なんでせう？」

上条の渾身のツツコミが炸裂する。

「そんなことはどうでもいいんだにゃー」

軽くスルーされた。

「いつの間にかだけど、こんな道に来てたらやばくないか？」

二人がいるのは、第七学区のケンカ通り。

スキルアウトが多く、一般の学生が通るには多分に危険な場所だ。

そんなところで上条当麻、いつもの不幸スキルが発動した。

落ちている空き缶の上に足が乗る。

スルツと滑って前のめりに倒れ、ドンと人にぶつかった。

上条が倒れ掛かったのは、分かりやすい非行少年、もといスキルアウトの集団だった。

「おい、派手にぶつ倒れてきちゃって。ケンカ売ってんのか？」

集団の一人がいかにもな台詞を吐いてくる。

「いやいや、上条さんはそんな無礼はいたしませんよ？」

「上条っていうのか。じゃあ、ちょっとこっちまで来てもらおうか、上条さん」

上条は最後の望みを隣の土御門に託す。

土御門がいるはずの場所には誰もいなかった。

「カミヤん、せいぜい頑張るんだにゃー」

と路地裏の方から声だけが聞こえた。

そちらの方向を見ると、土御門がニヤツと意味深に小さな笑みを残して去っていった。

「不幸だあああああああ！」

こうなれば逃げるが勝ちだと思つと、上条はスキルアウトの集団に背を向けて走り出す。

「おら！ 待てや！！」

長点上機学園。

学園都市の五本指に数えられ、能力開発においてトップを誇る学校だ。

しかし、能力以外に突出した一芸があればやっているとわれ、『設定としての便利さから』捨井——ステイル——が通っていたことにした学校だ。

勿論書類上、建前上の話なので、ステイルは長点上機学園については一般の学園都市住人レベルにしか知らない。

長点上機学園は、その多様性から、本校だけでは行えないことを別の学区に分校をつくることで補完している。

その一つが第七学区にもある。

加東の仲間は、その学校に通っているのか？

ステイルは学校前まで戻ってきていた。

長点上機学園前のバス停を経由してきたものの、加東を見つけることはできなかった。

いずれにしろ証拠は学校に残っているのだ。

犯人は現場に戻るとも言うし、加東の行き先が分からなくなった以上、下手に動くのはよいことではない。

学校は既に放課後。

テストが間近に迫っているために、部活で残っている生徒はいない。

（土御門は上条たちを引き離すと言っていたな……）

とりあえずは一人で調査するしかない。

人があふれている昼間では難しいが、この時間帯ならわずかな魔力の痕跡を探すこともできる。

ステイルは先ほど見せられた盗撮カメラの場所を思い出す。

普段使われない校舎の、二階の廊下の端に、不自然なカメラがあったはずだ。

おそらく、目的は盗撮ではなく監視。

そのあたりが怪しい。

見当をつけたステイルだったが、

「血？」

よくみると、それは血の跡だった。

（まさか……！？）

ステイルは土御門の例を見て知っていた。
能力者が魔術を使った場合の副作用を……。

「クソッ！」

ステイルは血の跡を追う。

血の跡はあまり使われていなさそうな校舎の方へ繋がっていた。

（加東一人か……。それとも協力者のほうか？）

ついに血の跡は一つの教室に辿り着く。

ステイルはガラッとドアを開けた。

教室のほぼ中心にはこちらに背を向けて一人の少年が天上を見上げるように立っていた。

（加東じゃない）

ステイルに気づいたのか、その少年の首がグリッと回る。

「こんにちは」

よく見ると、その部屋は血に染まっていた。

けれど、その血は声の主のものではないようだった。

声の主である少年の足元には一体の赤い何か。

よく見ると……加東だ。

血まみれになった加東が、少年の足元に転がっているのだ。

そのアブノーマルな風景に武器を持たないステイルは身構える。

「君を血祭りに上げたいんだけど、別にいいよね？」

華奢そつな少年は、ステイルをにやりと見ると、

「勿論、答えは聞いてないけど」

13話 二人目（後書き）

これから先は怒涛のバトルパート！

となる予定です。

感想、レビュー、評価、お願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8409m/>

とある神父の潜入捜査

2012年1月5日21時48分発行